

2023年度 3Q決算 決算説明資料

2024年2月2日



エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社

■2023年度 3Q累計（4-12月）実績

< 連結 >

- ・ 好調な業績が続く百貨店事業が牽引、営業利益以下各段階利益は3Q累計で過去最高
- ・ 上期同様に全てのセグメントが増益

< セグメント別 >

- ・ 百貨店事業 円安や株高などの外部環境の好影響が継続
消費の本格化により衣料品・化粧品が回復、国内売上が堅調に推移
インバウンド売上が過去最高ペースで推移
販管費は売上連動経費の増加に対し抑制
- ・ 食品事業 点単価の上昇は鈍化も客単価は引き続き前年超え、客数の回復もあり、既存店売上高は前年を超えて推移
販管費は人件費を中心に対予想で抑制
- ・ 商業施設事業 ホテルが高稼働率を継続、大幅増益

■2023年度 通期見通し

- ・ 百貨店事業が想定を上回って推移しており、通期見通しを上方修正
- ・ 営業利益以下の各段階利益は過去最高の見通し

まず今回の第3四半期決算のダイジェストです。

連結業績は、好調な業績が続く百貨店事業がけん引し、それ以外のセグメントも増益となった結果、増収増益となりました。

営業利益、経常利益、四半期純利益と各段階利益は第3四半期決算として過去最高となりました。

セグメント別では、百貨店事業が大きく伸長しました。

円安や株高など外部環境の好影響が継続し、国内は堅調に推移するとともに、インバウンド売上の大幅な増加が寄与いたしました。

食品事業は、値上げが一巡し、点単価の上昇幅は鈍化してきておりますが、客数の回復もあり、既存店売上が前年を超えて推移しました。
また、経費のコントロールも進めており増益となりました。

商業施設事業は、ビジネスホテルの高稼働が継続し大幅な増益となりました。

この第3四半期実績を受けて、通期見通しを上方修正いたしました。

好調な百貨店事業を上方修正しており、営業利益、経常利益、当期純利益とも通期で過去最高となる見込みです。

次のスライドからそれぞれについて、詳しくご説明いたします。

I . 2023年度 3 Q実績

II . 2023年度 通期見通し

ここから、第3四半期決算実績、通期見通しの2つのトピックについてご説明いたします。

- 1 . 連結業績
- 2 . セグメント別業績
- 3 . 百貨店事業
- 4 . 食品事業
- 5 . 商業施設事業
- 6 . 特別利益・特別損失

第3四半期決算実績について、連結業績、セグメント別業績、百貨店事業、食品事業、商業施設事業、特別利益・特別損失の順にご説明いたします。

I - 1. 連結業績

- ▶ 好調な百貨店事業が牽引し大幅に増収増益、営業利益、経常利益、四半期純利益は3Q時点で過去最高
- ▶ 全てのセグメントが増益、通期計画に対して順調に進捗し、営業利益は通期予想を上回る
- ▶ 3Q期間で百貨店旧配送センターの売却益を計上

(単位：億円)	3Q累計		3Q	
	本年	対前年	本年	対前年
総売上高	8,016	109.1%	2,965	108.5%
売上高	4,955	104.3%	1,769	103.8%
営業利益	222	+127	123	+39
経常利益	239	+123	133	+44
特別利益	44		34	
特別損失	27		15	
親会社株主に 帰属する四半期純利益	178	+68	115	+33

連結業績についてご説明いたします。

好調な百貨店事業がけん引し、大幅な増収増益となりました。

営業利益、経常利益、四半期純利益は第3四半期累計で過去最高となりました。

第3四半期単体でも増収増益、想定も上回って推移いたしました。

また、第3四半期には百貨店の旧配送センターの売却益を計上しております。

I - 2. セグメント別業績 (3Q累計)

▶ 全てのセグメントで増益、会社予想も超過

(単位：億円)	総額売上高		営業利益		
	本年	対前年	本年	対前年	
百貨店	4,247	116.3%	168	+89	
食品	3,236	102.6%	72	+27	
商業施設	244	88.7%	29	+12	
その他	290	108.8%	14	+37	
連結調整			▲61	▲38	
合計	8,016	109.1%	222	+127	

(単位：億円)	
H2O単体	対前年
営業利益	+31
グループ内 受取配当金 (全額連結消去)	+28

セグメント別業績については、ご覧のスライドの通りです。

百貨店事業が売上、営業利益ともに大幅な伸長しました。
百貨店以外のセグメントも二桁の増益となっております。
すべてのセグメントで想定を上回り、順調な推移となっております。

I - 3. 百貨店事業 - 業績概要

- ▶ 高額商材、インバウンド売上が強い都心店が好調、阪急本店・博多阪急は前年・予想を大きく上回って推移
- ▶ 売上連動経費が増加したものの、売上増による粗利益増加が大きく上回り増益

阪急阪神百貨店

(単位：億円)	3Q累計		3Q		3Q累計店別売上	対前年
	本年	対前年	本年	対前年		
売上高	4,221	116.3%	1,646	114.4%	都心店	119%
売上総利益	943	+125	369	+43	阪急本店 博多阪急	118% 123%
総利益率	22.34%	▲0.18pt	22.41%	▲0.24pt	郊外店	104%
その他収入	30	+6	11	+1	(単位：億円)	
販管費	806	+41	283	+9	3Q累計 販管費増減内訳	対前年
営業利益	167	+89	97	+35	売上連動経費	+16
					家賃・減価償却 (阪神梅田本店など)	+15
					人件費増	+11

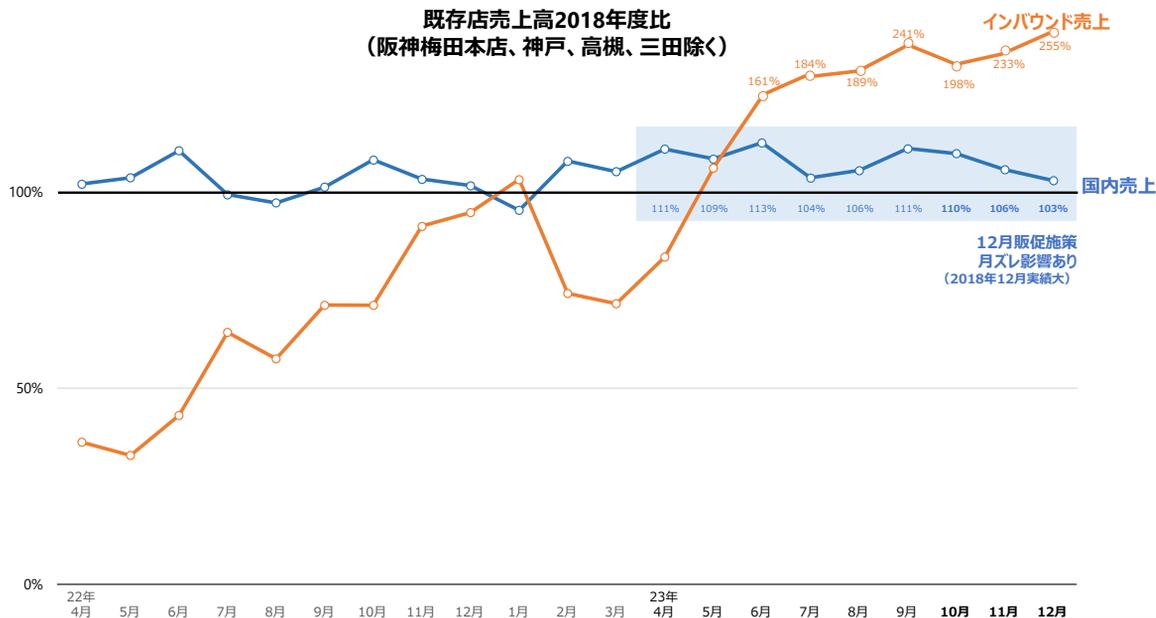
※収益認識に関する会計基準適用前の数値を記載

百貨店事業についてご説明いたします。

店別の売上では、郊外店が前年比104%であるのに対して、高額商材やインバウンド売上が強い都心店が前年比119%と好調に推移しました。大幅に伸びた売上に伴い、売上連動経費や家賃などの経費も増加しましたが、粗利の増加が上回り、第3四半期累計の営業利益167億円と前年同期に対し倍以上の増益となりました。

I - 3. 百貨店事業-既存店売上高推移 (2018年度対比)

- ▶ 国内売上) 都心店好調・郊外店堅調が継続、商品別では濃淡があるものの全カテゴリーで前年超え
高額商材に加えて、衣料品・化粧品が好調
- ▶ インバウンド売上) 円安・高額商材ニーズの伸長が継続し、6月以降は単月での最高売上の更新が続く



既存店の国内外の売上推移についてご説明いたします。

グラフは、改装した阪神本店や神戸阪急などを除く既存店の対2018年度の売上の推移を、国内売上とインバウンド売上に分けて記載しています。
青色が国内売上、オレンジ色がインバウンド売上です。

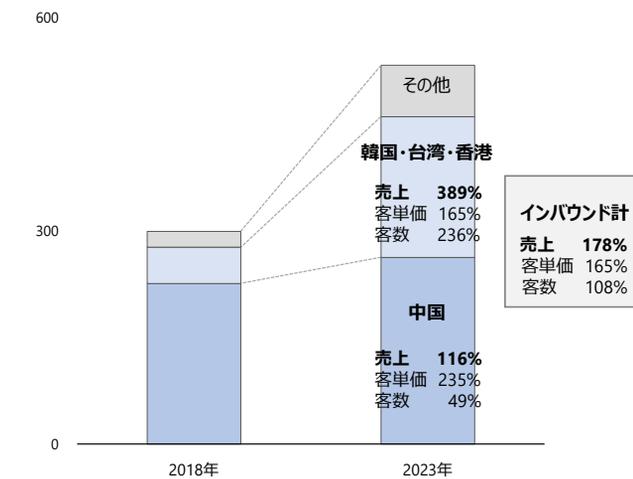
ご覧のように、青色の国内売上は、今年度、安定して2018年度を超えて堅調な推移を示しています。
ラグジュアリーブランドやジュエリーなど高額商材が引き続き好調なことに加えて、衣料品や化粧品などのカテゴリも順調に推移しております。

インバウンド売上については、引き続き大きな伸びを示しております。
高額商材への強い需要に、円安の後押しもあり、6月から12月は単月最高売上を更新する結果となっております。
インバウンド売上は次のスライドでもう少し詳しくご説明いたします。

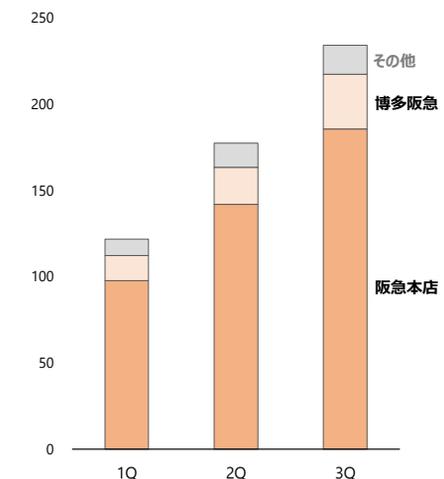
I - 3. 百貨店事業—インバウンド売上

- ▶ 近隣3カ国の伸長、中国の回復によりインバウンド全体で2018年比1.8倍まで拡大、客数・客単価ともに2018年水準超え円安継続により、客単価が高水準で推移
- ▶ 6月以降インバウンド売上は単月での過去最高を連続して更新、3Q期間平均日商は2.5億円と11月予想（同1.3億円）を上回って推移

3Q累計国別インバウンド売上



店別売上



こちらのスライドでは、インバウンド売上をもう少し分解してお示ししております。

左のグラフは2018年度と今年度の第3四半期累計のインバウンド売上を国別に示しております。

まずインバウンド売上の総額は2018年度の300億円から今年度は530億円に達し、約1.8倍伸長しました。客数、客単価とも2018年度を超え、特に円安効果で客単価が大きく伸びております。

2018年度は8割近かった中国のシェアがおよそ5割となる一方で、韓国・台湾・香港が2018年度比で4倍程度伸び、シェアも4割近くになっております。

右のグラフにあるように、四半期別で追ってみると、期ごとに大きく伸長しており、特に都心店としての性格がはっきりしている阪急本店と博多阪急が集中的に売上を伸ばしております。

第2四半期決算発表時点で、下期のインバウンド売上の平均日商の想定は約1.3億円とお伝えしておりましたが、10月から12月の実績は約2.5億円と想定を大きく超えるものとなっています。

I - 4. 食品事業

- ▶ 22年10月からの値上げが一巡し点単価の上昇は鈍化も、客単価は引き続き前年を超える。客数も安定して前年を超え、既存店売上高は前年を上回って推移
- ▶ 売上増加による粗利益の増加に加え、販管費を予想から抑制し増益
- ▶ 食品製造は惣菜・ベーカリーが好調、宅配は阪急キッチンエール関西の新センター稼働と会員システム変更による影響で減収減益

	3Q累計				3Q			
	売上高		営業利益		売上高		営業利益	
	本年	対前年	本年	対前年	本年	対前年	本年	対前年
(単位：億円)								
イズミヤ・ 阪急オアシス	1,891	102.6% <small>既存店 104%</small>	49	+21	662	102.8% <small>既存店 104%</small>	21	+2
関西 スーパーマーケット	994	103.4% <small>既存店 104%</small>	32	+12	342	103.0% <small>既存店 104%</small>	12	+3
食品スーパー2社計	2,885	102.9%	82	+33	1,004	102.9%	33	+5
食品製造・ 宅配計	306	96.4%	▲3	▲3	110	99.4%	1	▲1

※収益認識に関する会計基準適用前の数値を記載

次に食品事業についてご説明いたします。

イズミヤ・阪急オアシスと、関西スーパーマーケットの食品スーパー2社は、増収増益となりました。

2022年10月から段階的に行ってきた値上げは一巡し、点単価の上昇は鈍化しましたが、客単価は前年を超えるとともに客数も回復し、既存店売上の前年比は両社ともに104%となりました。

コスト増加要因もあるものの経費面でもコントロールを行い、粗利増と経費抑制により増益となりました。

食品スーパー以外では、阪急デリカアイや阪急ベーカリーなどの食品製造は好調なもの、新センター稼働や会員システム変更の影響がある宅配事業が減収減益となったこともあり、食品製造・宅配合計では減収減益となりました。

I - 5. 商業施設事業

- ▶ 大井開発の業績伸長により、3Q累計で大幅増益
- ▶ 大井開発が運営するビジネスホテルは3Q期間も高稼働率を維持し、過去最高益ペースで推移
- ▶ 大井開発除く子会社ではH2O商業開発の店舗閉鎖の影響もあり減収（想定通り）

(単位：億円)	3Q累計				3Q			
	売上高		営業利益		売上高		営業利益	
	本年	対前年	本年	対前年	本年	対前年	本年	対前年
大井開発	47	159.5%	20	+13	17	141.1%	8	+4
大井開発除く計	213	81.4%	11	+0	74	80.1%	5	▲0

※収益認識に関する会計基準適用前の数値を記載

商業施設事業は減収増益となりました。

増益をけん引したのはビジネスホテルが高稼働を継続した大井開発です。コロナ禍中のコスト見直しも寄与し、過去最高益ペースとなる大幅増益となっております。

大井開発以外の会社では、イズミヤショッピングセンターを運営するH2O商業開発が店舗閉鎖の影響もあり減収となっておりますが、おおむね想定通りの推移となっております。

I - 6. 特別利益・特別損失

▶ 3Q期間で固定資産売却益（百貨店旧配送センター土地）を計上

(単位：億円)	主な項目	金額	主な内容
特別利益	固定資産売却益	44	百貨店旧配送センター土地売却 旧イズミヤ大久保店 土地売却
特別損失	固定資産除却損	21	阪急阪神百貨店 (阪急本店、神戸阪急、高槻阪急)
	事務所移転費用	3	食品事業 本社部門集約
	減損損失	2	
	店舗等閉鎖損失	2	

特別利益・特別損失については、この第3四半期で百貨店旧商品センターの土地売却益を計上しております。
それ以外の特別損失などをご覧の通りとなっております。

Ⅱ. 2023年度 通期見通し

- ▶ 百貨店事業が想定を上回って推移しており、通期見通しを上方修正
- ▶ 好調が続く百貨店事業が牽引し、売上、営業利益、経常利益、純利益は過去最高を見込む

(単位：億円)	通期			上期		下期		
	修正予想	対前年	対中期 経営計画	実績	対前年	修正予想	対前年	対11月 予想
総額売上高	10,600	108.2%	114.0%	5,052	109.5%	5,548	107.1%	101.8%
売上高	6,830	108.7%		3,185	104.6%	3,645	112.6%	100.8%
営業利益	245	+131	+75	99	+88	146	+43	+25
経常利益	260	+130	+120	107	+78	153	+52	+35
親会社株主に 帰属する 当期純利益	180	+16		63	+35	117	▲19	+50

最後に、2023年度の通期見通しについてご説明いたします。

実績でもお話したように百貨店事業が想定を上回って推移したことを受けて、通期見通しを上方修正いたしました。

営業利益は220億円から245億円に、経常利益は225億円から260億円に、当期純利益は130億円から180億円にそれぞれ修正しており、いずれも過去最高を見込んでおります。

Ⅱ. 2023年度 通期見通し

- ▶ 11月公表見通しから百貨店事業を上方修正
- ▶ 百貨店以外のセグメントはおおむね想定通り進捗

(単位：億円)	総額売上高		営業利益		
	通期予想	対前年	通期予想	対前年	対中期 経営計画
百貨店事業	5,653	114.9%	200	+97	+65
食品事業	4,218	101.4%	80	+25	+18
商業施設事業	349	98.1%	30	+12	+12
その他事業	380	105.1%	▲2	+29	+18
連結調整			▲63	▲32	▲38
合計	10,600	108.2%	245	+131	+75

セグメント別の業績見通しはこちらのスライドの通りです。

11月公表見通しから百貨店事業の営業利益を25億円上方修正しております。それ以外のセグメントはおおむね想定通り進捗しており修正はございません。今年度を最終年度とする中期経営計画の目標値に対して、いずれのセグメントも大きく上回るものとなっていることも併せて確認いただけるかと思えます。

第3四半期の決算実績および2023年度の通期見通しについては以上です。ありがとうございました。



本資料に記載された情報については、資料作成時点での当社の判断であり、その情報の正確性を保証するものではなく、今後予告なしに変更されることがあります。

万が一、この情報に基づいて被ったいかなる損害に関しても、当社及び情報提供者は一切の責任を負いませんので、ご承知おき下さい。

また、本資料の著作権は全て当社に帰属し、著作権法に定める私的利用の範囲を超えて無断で、複写・転載等することを禁じます。

エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社